

1.10

第173回東京芸術劇場マチネーシリーズ
〈土〉東京芸術劇場コンサートホール／14時開演

The 173rd Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Saturday, 10th January, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

1.11

第78回みなとみらいホリデー名曲シリーズ
〈日〉横浜みなとみらいホール／14時開演

The 78th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series
Sunday, 11th January, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮 準・メルクル 6ページ
Conductor JUN MÄRKL

ソプラノ 安藤赴美子 8ページ
Soprano FUMIKO ANDO

テノール 永田峰雄 8ページ
Tenor MINEO NAGATA

チェロ ダニエル・ミュラー＝ショット 9ページ
Cello DANIEL MÜLLER-SCHOTT

コンサートマスター ダニエル・ゲーデ
Concertmaster DANIEL GAEDE

ワグナー 楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉から第1幕への前奏曲 [約9分] 11ページ

WAGNER / “Die Meistersinger von Nürnberg”, Prelude to Act I

ワグナー 歌劇〈ローエングリン〉から“はるかな国”/第3幕への前奏曲 [約5分/約3分]

WAGNER / “Lohengrin”, “In fernem Land” / Prelude to Act III

ワグナー 歌劇〈タンホイザー〉から“おごそかなこの広間よ”/序曲 [約5分/約14分]

WAGNER / “Tannhäuser”, “Dich, teure Halle, grüss ich wieder” / Overture

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から
“行進曲”“アラビアの踊り”“トレパック”“花のワルツ” [約13分] 13ページ

TCHAIKOVSKY / March, Arabian Dance, Trepak and Waltz of the Flowers from “The Nutcracker”

チャイコフスキー ロココの主題による変奏曲 イ長調 作品33 [約18分]

TCHAIKOVSKY / Variations on a Rococo Theme in A major, op. 33

チャイコフスキー イタリア奇想曲 作品45 [約15分]

TCHAIKOVSKY / Capriccio Italien, op. 45

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）

[協力] 横浜みなとみらいホール（1/11） [事業提携] 東京芸術劇場（1/10）

※1月11日公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

1.16

第544回 定期演奏会
〈金〉サントリーホール／19時開演

The 544th Subscription Concert
Friday, 16th January, 19:00 / Suntory Hall

指揮 準・メルクル 6ページ
Conductor JUN MÄRKL

ピアノ 金子三勇士 9ページ
Piano MIYUJI KANEKO

コンサートマスター 小森谷巧
Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ウェーベルン パッサカリア 作品1 [約11分] 15ページ

WEBERN / Passacaglia op. 1

シューマン ピアノ協奏曲 イ短調 作品54 [約31分] 16ページ

SCHUMANN / Piano Concerto in A minor, op. 54

I . Allegro affetuoso

II . Intermezzo. Andantino grazioso

III . Allegro vivace

[休憩 Intermission]

ブラームス（シェーンベルク編）ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 作品25（管弦楽版） [約40分] 17ページ

BRAHMS (arr. Schönberg) / Piano Quartet No. 1 in G minor, op. 25 (orchestra version)

I . Allegro

II . Intermezzo: Allegro ma non troppo

III . Andante con moto

IV . Rondo alla Zingarese: Presto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）

[協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

2

3

1.23

第13回読響メトロポリタン・シリーズ
〈金〉東京芸術劇場コンサートホール／19時開演

The 13th Yomikyo Metropolitan Series
Friday, 23rd January, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

1.24

第578回サントリーホール名曲シリーズ
〈土〉サントリーホール／14時開演

The 578th Suntory Hall Popular Series
Saturday, 24th January, 14:00 / Suntory Hall

指揮 **下野竜也** (首席客演指揮者) **7ページ**
Conductor **TATSUYA SHIMONO** (Principal Guest Conductor)

マリンバ **小森邦彦** **10ページ**
Marimba **KUNIIHIKO KOMORI**

コンサートマスター 長原幸太
Concertmaster **KOTA NAGAHARA**

武満徹 **ジティマルヤ** [約15分] **19ページ**

TORU TAKEMITSU / Gitimalya -Bouquet of Songs-

[休憩 Intermission]

マーラー **交響曲 第5番** 嬰ハ短調 [約68分] **20ページ**

MAHLER / Symphony No. 5 in C sharp minor
I . Trauermarsch
II . Stürmisch bewegt, mit größter Vehemenz
III. Scherzo
IV. Adagietto
V . Rondo-Finale

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (1/23)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業) (1/24)

[事業提携] 東京芸術劇場 (1/23)

1.28

第6回気楽にクラシック～ヨーロッパ音楽紀行～
〈水〉東京オペラシティ コンサートホール／20時開演 (19時30分から解説)

The 6th "Enjoy classic!" Series Wednesday, 28th January, 20:00
(Pre-concert talks from 19:30) / Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 **下野竜也** (首席客演指揮者) **7ページ**
Conductor **TATSUYA SHIMONO** (Principal Guest Conductor)

ピアノ **クシシュトフ・ヤブウォンスキ** **10ページ**
Piano **KRZYSZTOF JABŁOŃSKI**

ナビゲーター **中井美穂** **22ページ**
Navigator **MIHO NAKAI**

コンサートマスター 長原幸太
Concertmaster **KOTA NAGAHARA**

《哀愁の祖国、ポーランド》

ルトスワフスキ **小組曲** [約11分] **22ページ**

LUTOSŁAWSKI / Little Suite

- I . Fujarka (Fife)
- II . Hurra Polka
- III. Piosenka (Song)
- IV. Taniec (Dance)

ショパン **ピアノ協奏曲 第1番** ホ短調 作品11 [約39分]

CHOPIN / Piano Concerto No. 1 in E minor, op. 11

- I . Allegro maestoso
- II . Romanze - Larghetto
- III. Rondo - Vivace

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

[監修] **小林研一郎** (特別客演指揮者)

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[後援] ポーランド共和国大使館、ポーランド広報文化センター

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

広いレパートリーと情熱的な指揮
国際的に活躍する俊英指揮者

準・メルクル

Jun Märkl

- ◇ 1月10日 東京芸術劇場マチネ・シリーズ
- ◇ 1月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇ 1月16日 定期演奏会



©Jean-Baptiste Millot

ドイツ人ヴァイオリニストの父、日本人ピアニストの母のもとに1959年、ドイツ・ミュンヘンに生まれる。ピアノ、ヴァイオリン、指揮をハノーファー音楽大学で学んだ後、ミュンヘンでチェリビダッケに、米・ミンガン大学でマイヤーに師事。86年、ドイツ音楽評議会の指揮者コンクールで優勝。その後ボストン響の奨学生となり、タングルウッド音楽祭にてバーンスタインと小澤征爾の薫陶を受けた。

ルツェルン、ベルン、ダルムシュタットの各歌劇場で指揮経験を深め、91年にザールラント州立劇場の音楽総監督に就任。94年にはマンハイム歌劇場の音楽総監督に転身した。その間の93年にはウィーン国立歌劇場に〈トスカ〉でデビューし成功を収め、以後同歌劇場でも数々のオペラを指揮。その他バイエルン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、英国ロイヤル・オペラ、メトロポリタン・オペラなどにも多数出演している。オーケストラの指揮者としてはフランス国立リヨン管とライブツィヒ中部ドイツ放送(MDR)響の首席指揮者を歴任し、ミュンヘン・フィル、ハンブルク北ドイツ放送響(NDR)、パリ管、ボストン響、シカゴ響などにも客演している。

国内ではN響、水戸室内管、新日本フィル、東京響へ客演、新国立劇場での〈ニーベルングの指環〉では圧倒的な成功を収めた。札幌のPMF音楽祭への出演や国立音楽大学の招^{しょうへい}聘教授として後進の育成にも熱心に取り組んでいる。東日本大震災後には若手音楽家支援のため水戸室内管へ4挺のヴァイオリンを寄贈、これらの楽器は茨城県内でヴァイオリンを学ぶ学生などへ貸与されている。

読響とは今回が初共演。

和洋の響きを描き分け
時代を切り拓く入魂の指揮

下野竜也

(首席客演指揮者)

Tatsuya Shimono
(Principal Guest Conductor)

- ◇ 1月23日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇ 1月24日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇ 1月28日 気楽にクラシック



©読響(撮影:堀田力丸)

2006年11月から13年3月まで読響の初代正指揮者を務め、現在は首席客演指揮者。古典から現代までの幅広いレパートリーを縦横に組み合わせた独自のプログラミングは常に話題を呼んでいる。邦人作品への造詣も深い。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり朝比奈隆氏ら巨匠たちから学んだ。文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送響、ローマ・サンタチェチーリア管、ミラノ・ヴェルディ響、ストラスブル・フィル、シリコンバレ響などと共演し、国際的にも活躍している。また、サイトウ・キネン・フェスティバル松本、アフィニス音楽祭、霧島国際音楽祭、宮崎国際音楽祭、別府アルゲリッチ音楽祭など、各地の音楽祭にも招かれている。学校コンサート、親子コンサートなどの教育プログラム、ジュニアオーケストラの指揮、指揮マスタークラスなど、後進の指導・育成にも熱意をもって取り組んでおり、その活動は多岐にわたる。

上野学園大学教授、広島ウィンドオーケストラの音楽監督、京都市響の常任客演指揮者を兼務している。出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など、受賞も数多い。

多彩で細やか、品格ある表現
次世代を担うプリマ・ドンナ

安藤赴美子

Soprano
Fumiko Ando



©Shingo Azumaya / Octavia Records Inc.

札幌市出身。国立音楽大学卒業後、同大学院修了。国立音楽大学オペラ研修所第3期生修了。文化庁派遣芸術家在外派遣員としてイタリア留学後、ローム ミュージック ファンデーション在外研究生として再度渡伊し研鑽を積んだ。パオラ・モリナーリ、セルジョ・ベルトッキ、田中久子らに師事。

2006年の東京二期会〈ラ・ボエーム〉ムゼッタ、07年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本（小澤征爾指揮）〈スペードの女王〉クロエで注目を集め、09年には宮本亜門の新演出による東京二期会〈椿姫〉ヴィオレッタに抜擢され、プリマ・ドンナとしての存在感を印象づけた。その後も新国立劇場等に数多く出演し、韓国・セジョン文化会館や愛知トリエンナーレでは〈蝶々夫人〉の題名役を演じ、大成功を収めた。

◇ 1月10日 東京芸術劇場マチネーシリーズ ◇ 1月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

欧州での活躍で磨かれた
輝かしく力強い歌声

永田峰雄

Tenor
Mineo Nagata



新潟県長岡市生まれ。東京藝術大学卒業、同大学院修了。1986年、第1回日本モーツァルト・コンクール優勝。88年と89年にはザルツブルク・ゾンマーアカデミーコンクール優勝とモーツァルトウム音楽院最優秀賞を相次いで受賞した。

91年にアサヒビール芸術文化財団の奨学生として渡欧。同年のザルツブルク音楽祭〈サティリコン〉に出演したのを契機に翌年ライブツィヒ歌劇場と契約、以後ヴェルツブルク歌劇場、トリアー歌劇場、ギーセン歌劇場、ボン歌劇場、ミュンスター歌劇場の専属歌手としてドイツを中心にヨーロッパで活躍した。

国内では98年の〈魔笛〉タミーノを皮切りに、〈ラインの黄金〉〈ドン・ジョヴァンニ〉で新国立劇場に登場。2003年にはシューマン〈詩人の恋〉を天皇陛下の御前で演奏したことで話題となった。

◇ 1月10日 東京芸術劇場マチネーシリーズ ◇ 1月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

知性と感性の見事な融合
世界をリードするチェリスト

ダニエル・ミュラー＝ショット

Cello
Daniel Müller-Schott



©Uwe Arens

1976年ドイツ、ミュンヘン生まれ。ワルター・ノータス、ハインリヒ・シフ、スティーヴン・イッサーリスに師事し、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチの指導も受けた。92年、15歳で「若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクール」で優勝し、国際的な注目を浴びた。

これまでに世界各地で演奏活動を展開し、14年1月にはベルリン・フィルとの共演も果たした。チェロ作品のレパートリー拡大にも熱心で、プレヴィンとルジツカからはチェロ協奏曲を献呈されている。優秀な室内楽奏者としても引く手あまたで、ムターとプレヴィンとともにトリオを結成し、世界各地で演奏している。

使用楽器は1727年製マッテオ・ゴフリラー「Exシャピーロ」。今回が読響と初共演。

◇ 1月10日 東京芸術劇場マチネーシリーズ ◇ 1月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

中欧の香りを身にまとう
本格派若手ピアニスト

金子三勇士

Piano
Miyuji Kaneko



©Kei Uesugi

1989年、日本人の父とハンガリー人の母のもとに生まれる。6歳で単身ハンガリーへ渡りバルトーク音楽小学校、11歳で国立リスト音楽院（特別才能育成コース）に入学。2006年全課程取得とともに日本に帰国、東京音楽大学附属高等学校に編入し、清水和音、迫昭嘉、三浦捷子に師事した。バルトーク国際ピアノコンクール優勝のほか数々のコンクールで優勝。10年にはCDデビュー。海外ではハンガリー、アメリカ、フランス、ドイツなどで演奏している。東京音楽大学および大学院を経て、現在はハンガリー国立リスト音楽院博士課程に在籍中。第12回ホテルオークラ音楽賞、第22回出光音楽賞を受賞。25歳の新星ピアニストとして今後の活躍が期待される。読響とはこれまでに小林研一郎、シルヴァン・カンブルランらの指揮で共演している。

◇ 1月16日 定期演奏会

マリンバのオリジナル作品にこだわり
世界で活躍する気鋭のマリンビスト

小森邦彦

Marimba
Kunihiko Komori



米・イーストマン音楽大学卒業、ジョン・ベックに師事。その後ジョンズ・ホプキンス大学ピーボディ音楽院にてウィリアム・マーシュ、ロバート・ヴァンサイスに師事、修士課程およびディプロマ課程を修了。以後、ウィッテン音楽祭、ダルムシュタット音楽祭、ニューヨーク・キメルセンター、リスボン・ベレム芸術文化センター、スペイン・サラマルテュソス、マカオ芸術博物館、武生国際音楽祭などに招かれ、マリンバの独奏、室内楽、協奏曲の演奏に取り組み、繊細緻密なパフォーマンスにより国際的に注目されている。

教育活動にも積極的で、カーティス音楽院、カールスルーエ音楽大学、アヴェイロ大学、ビルバオ音楽院、香港アカデミー等でレクチャーを続けている。国内では京都市立芸術大学で後進の指導にあたっている。

◇ 1月23日 読響メトロポリタン・シリーズ ◇ 1月24日 サントリーホール名曲シリーズ

ショパン演奏の神髄を世に伝える
ポーランドを代表するピアニスト

クシシュトフ・ヤブウォンスキ

Piano
Krzysztof Jabłoński



1965年、ポーランド・ヴロツワフ生まれ。ヤニナ・ブートルとアンジェイ・ヤシンスキ教授に師事し、マスタークラスでは、ルドルフ・ケーラーとニキタ・マガロフの下で研鑽を積んだ。カトヴィツェ音楽院在学中の85年にショパン国際ピアノコンクールで入賞を果たし87年に卒業。さらに96年には同音楽院で博士号を取得した。以後約30年にわたって世界的に活躍し、ベルリン・フィルを始めとする世界のオーケストラと共演を重ねている。2010年には霧島国際音楽祭に出演し、下野竜也の指揮でショパンの協奏曲第1番を披露した。

現在はワルシャワのフレデリック・ショパン音楽大学の教授を務めているほか、各地でのマスタークラスや講演会、国際ピアノコンクールの審査員を務めるなど、多方面で活躍している。読響とは今回が初共演。

◇ 1月28日 気楽にクラシック

プログラムノート

PROGRAM NOTES

飯尾洋一

いいお よういち・音楽ライター

第173回
東京芸術劇場マチネシリーズ

1.10 (土)

第78回
みなとみらいホリデー名曲シリーズ

1.11 (日)

ワーグナー

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉から第1幕への前奏曲

作曲:1862~67年/初演:1868年、ミュンヘン/演奏時間:約9分

歌劇〈ローエングリン〉から“はるかな国”/第3幕への前奏曲

作曲:1846~48年/初演:1850年、ワイマール/演奏時間:約5分(“はるかな国”)、約3分(第3幕への前奏曲)

歌劇〈タンホイザー〉から“おごそかなこの広間よ”/序曲

作曲:1843~45年/初演:1845年、ドレスデン/演奏時間:約5分(“おごそかなこの広間よ”)、約14分(序曲)

音楽や文学、舞踊などあらゆる芸術の融合を説いた総合芸術論を掲げ、従来のオペラの枠を超越した作品を創造したりヒャルト・ワーグナー(1813~83)。その作品世界は深遠で、ときに晦渋でもあるが、一方でこれらの作品は「聴く快楽」にあふれた一大スペクタクルでもある。本日の公演の前半では、ワーグナーの代表作から、華やかな名曲と名場面が並べられる。

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉は16世紀半ばを舞台に、マイスタージンガー(親方歌手)である靴屋のハンス・ザックスを登場人物とした喜劇的な作品。若い騎士ヴァルターは、美しい娘エーファに一目ぼれをして、互いに

惹かれあう。エーファと結婚するためにはマイスタージンガーの資格が必要のため、ヴァルターはマイスターの歌の規則を教わる。しかしヴァルターは規則から外れた歌をうたってしまう。ハンス・ザックスは、ヴァルターの自由奔放な歌に魅力を感じ、若い二人を結ばせようとする。

第1幕への前奏曲は、マイスターたちの威厳を表現する堂々たる主題で開始され、劇中で使われる動機が次々とあらわれる。とりわけ後半の精緻で重層的なオーケストレーションは壮麗で、祝祭的な雰囲気を感じだす。前奏曲でありながら、起伏に富み、この一曲だけで完結したドラマを感じさせる。

続く歌劇〈ローエングリン〉は、中世の伝説にもとづいた作品。白鳥の騎士ローエングリンは、弟殺しの嫌疑をかけられた王女エルザを救うためにあらわれる。騎士はエルザに決して自分の素姓を尋ねないことを誓わせて、決闘による裁判でエルザの潔白を証明する。騎士とエルザは結婚するが、夫に対する疑念に駆られたエルザは約束を破って、禁断の問いを発してしまう。騎士は自らが聖杯騎士のローエングリンであることを名乗り（“はるかな国”）、エルザに別れの言葉を告げる。

劇中では“はるかな国”より先だって演奏される**第3幕への前奏曲**は、しばしば単独で演奏される人気曲である。輝かしい金管楽器の強奏が圧倒的な高揚感をもたらし、ローエングリンとエルザの婚礼を晴れやかに祝う。二人の満ち足りた気分を表わすような穏やかで柔和な中間部をはさんで、ふたたび冒頭の勇壮な主題が回帰する。

歌劇〈タンホイザー〉は、中世のドイツ

を舞台としたミネゼンガー（吟遊詩人）である騎士タンホイザーの物語。禁断の地ヴェーヌスベルクで快樂の女神ヴェーヌスの虜となっていたタンホイザーは、歡樂の日々に飽きて清らかな乙女エリーザベトが待つ人間世界へと戻る。エリーザベトは歌の殿堂を訪れて、ふたたびタンホイザーが歌合戦に参加することになった喜びと希望を歌う（“**おごそかなこの広間よ**”）。しかし、タンホイザーは歌合戦でヴェーヌスを讃えてしまい、一同から激しく非難される。タンホイザーは巡礼の旅に出るも教皇から赦しを得られず、エリーザベトの純愛と死によって救済へと至る。

長大な**序曲**は、敬虔な「巡礼の合唱」の主題で開始され、巡礼たちが遠くから次第に近づいてくる様子が描かれる。ひとしきり音楽が高まった後、官能的なヴェーヌスの世界が華麗に展開され、その後ふたたび「巡礼の合唱」の主題が帰り、徐々に力強さを増しながら壮大なクライマックスを築く。

楽器編成／【楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉から**第1幕への前奏曲**】フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、ハープ、弦五部 【歌劇〈ローエングリン〉から**“はるかな国”**】フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル）、弦五部、独唱テノール 【歌劇〈ローエングリン〉から**第3幕への前奏曲**】フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル、タンブリン）、弦五部 【歌劇〈タンホイザー〉から**“おごそかなこの広間よ”**】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、ティンパニ、弦五部、独唱ソプラノ 【歌劇〈タンホイザー〉から**序曲**】フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル、タンブリン）、弦五部

チャイコフスキー バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から “行進曲”“アラビアの踊り”“トレパック”“花のワルツ”

作曲：1891～92年／初演：1892年、ペテルブルグ／演奏時間：約13分

ロココの主題による変奏曲 イ長調 作品33

作曲：1876～77年／初演：1877年、モスクワ／演奏時間：約18分

イタリア奇想曲 作品45

作曲：1880年／初演：1880年、モスクワ／演奏時間：約15分

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）はワーグナーより27年遅れてロシアに生まれた。年齢は離れているが、ともに同時代を生きた作曲家である。ほかの多くの作曲家と同様、チャイコフスキーにとってもワーグナーの存在は決して小さくはなかった。バイロイトで〈ニーベルングの指環〉が初演された際には、リストやブルックナー、サン＝サーンス、グリーグらと同様に、この地を訪れている。チャイコフスキーはワーグナー崇拜者にはならなかったものの、その桁外れの才能は認めており、とりわけ〈ローエングリン〉や〈タンホイザー〉のような初期の作品を評価していたようだ。また、リムスキー＝コルサコフによれば、チャイコフスキーの幻想序曲〈テンペスト〉で描かれる弦楽器による波打つ海面の表現は、ワーグナーの〈ラインの黄金〉冒頭を手本にしているという。

チャイコフスキーもワーグナーと同じく数多くの舞台作品の傑作を残している

が、なにより特筆すべき功績は〈白鳥の湖〉〈眠りの森の美女〉〈くるみ割り人形〉といったバレエ音楽への貢献だろう。とりわけ〈くるみ割り人形〉にちりばめられた名曲の数々は、コンサートはもとより、BGMやCMなどでも頻繁に使用され、広く親しまれている。

〈くるみ割り人形〉の物語はクリスマスイブを舞台にくりひろげられる。夜、時計の針が12時を指すと、くるみ割り人形をプレゼントされた少女クララの体は人形と同じ大きさに縮む。生命を宿したくるみ割り人形は、クララの助けを借りて宿敵のハツカネズミ軍団と戦って勝利を収める。すると人形は王子様に変身し、クララをお菓子の国へと誘う。魔法の城では、さまざまな精たちが歓迎の踊りを披露する。

本日はこの名作バレエから、愛らしい**“行進曲”**、コーヒーの精によるエキゾチックな**“アラビアの踊り”**、エネルギーなロシアの踊り**“トレパック”**、流麗な**“花のワルツ”**が演奏される。バレ

エ音楽はもとより、交響曲においてもワルツを好んで使用したチャイコフスキーだが、とりわけ“花のワルツ”にあふれるロマン的な情感の豊かさと、優美で幻想的な味わいには、この作曲家の最良の美質が発揮されている。

チャイコフスキーは協奏曲や協奏的な作品でも卓越した手腕を発揮している。作曲者の友人であったチェリスト、フィッツェンハーゲンのために書かれた『ロココの主題による変奏曲』では、独奏チェロが鮮やかな技巧を披露する。「ロココ風」とは本来美術や建築の分野で用いられる概念だが、音楽では18世紀風の優雅で洗練されたスタイルを指す。管弦楽の編成も古典派時代と同様の簡潔さを持っている。冒頭に登場する古雅な自作主題が次々と変奏され、多彩で生き生きとした表情を浮かびあがらせる。

当初、チャイコフスキーは主題と八つの変奏からなる作品として曲を書いたが、校訂を頼まれたフィッツェンハーゲンは演奏効果を高めるために、作曲者に無断で作品に手を入れ、1曲の変奏をカットした上に曲順も変更して曲を出版してしまう。これが好評を博したことから、作

品はフィッツェンハーゲン版のままで広く知られることになった。近年では作曲家本来の形を復元した原典版で演奏されることもあるが、本日は従来からのフィッツェンハーゲン版で演奏される。

最後に演奏される『イタリア奇想曲』は、チャイコフスキーの音楽のなかでも、もっとも明るく晴れやかな作品のひとつだろう。わずか80日間で破綻した結婚生活の後、チャイコフスキーはロシアを離れ、スイス、フランス、イタリアなど欧州各地を旅した。その後、音楽院の仕事を辞職すると、多くの時間を西欧各地で過ごすようになる。とりわけイタリアの明るい風土と文化に魅了されたチャイコフスキーは、現地で耳にした民謡や軍隊ラッパなどを素材にして、この奇想曲を書きあげた。冒頭のトランペットによる主題は、ローマ滞在中にホテルで耳にした、騎兵隊の宿舎から聞こえるファンファーレに由来する。弦楽器による愁いを帯びた民謡主題や、木管楽器によるひなびた主題が続き、やがて南イタリアの民俗舞踊タランテッラのリズムによって活発な主題が登場する。終結部では一段と情熱的に高潮し、熱狂的な雰囲気の中で曲を閉じる。

楽器編成／【バレエ音楽『くるみ割り人形』から】フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル、タンブリン）、ハープ、弦五部 【ロココの主題による変奏曲】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏チェロ 【イタリア奇想曲】フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール）、ハープ、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

広瀬大介

ひろせ だいすけ・音楽学、音楽評論

第544回
定期演奏会

1.16 金

ウェーベルン パッサカリヤ 作品1

作曲：1908年／初演：1908年11月8日、ウィーン／演奏時間：約11分

後年の作風を内包する、作曲家の「卒業制作」

後年の我々は、アルノルト・シェーンベルクの名を「作曲家」というイメージと結びつけがちだが、その生涯を知れば知るほど、むしろその本分は「教師」にあったのではないか、という想いを強くする。勤勉かつ熱心に、学生に作曲技法を教えるその姿勢は、自身の並外れたカリスマ性と相まって、多くの弟子を生むことにつながった。数多い弟子の中で、アルバン・ベルク、そしてアントン・ウェーベルン（1883～1945）が、師の教えを受け継ぎ、豊かに発展させた。

1904年、音楽学の学位を得たウェーベルンは、あらためてシェーンベルクのもとに弟子入りし、5年にわたって研鑽を積む。1908年に作曲した『パッサカリヤ』は、いわばその「卒業制作」であり、作品1を冠す

ことで、実質的な作曲家としての活動を開始することになる。師が敬愛するブラームスの交響曲第4番の最終楽章でも用いられた、この形式を選んだのも偶然ではない。冒頭、弦楽器のピッツィカートによって提示される八つの音、D-C#-Bb-Ab-F-E-A-D（レド#-シb-ラb-ファ-ミ-ラ-レ）が、この後の23回にわたる変奏で保たれ、バロック時代のパッサカリヤの手法をかなり愚直に守り続けている。二短調・二長調という調性感を保ってはいるが、この音の選び方には後年の音列や12音技法への萌芽が、そして敢えてオーケストレーションを薄いまま保ち、各楽器の音が際立つように計算するところには、後年の音色旋律への萌芽が見られ、後にウェーベルンが歩んだ作曲家としての道程が凝縮されてもいる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム）、ハープ、弦五部

シューマン ピアノ協奏曲

イ短調 作品54

作曲:1841年、1845年／初演:1845年12月4日、ドレスデン／演奏時間:約31分

ピアノと管弦楽による新たな表現の可能性を追求

ロベルト・シューマン(1810～56)は、父親譲りの文学的才能を、初期に集中して作曲したピアノ曲へと存分につぎ込んだ。文学的内容を音楽の世界に持ち込むべく、「ノヴェレッテン」(短編小説の意)という、あらたな形式を生み出してさえいる。このことは、シューマンが旧来の形式(とりわけソナタ形式)による作曲を決して得意としてはいなかったことと、表裏一体の関係でもある。形式の束縛から自由になろうとしつつ、同時に堅固な形式によって作曲家としての能力を証明しようという、シューマンの相反する想いは、その作風に多様な彩りを与えることになる。

シューマンが1841年5月にライプツィヒで作曲した〈ピアノと管弦楽のための幻想曲(ファンタジー)〉は、単一楽章の作品として手がけられたが、結局演奏されることはなかった。後に、ドレスデンへと移住した1845年6、7月にまず第3楽章が作られ、ついで第2楽章が作り足される。幻想曲はそのまま第1楽章として転用された。

そもそも〈幻想曲〉であった**第1楽章**(アレグロ・アフエツトゥオーゾ)が独立し

た作品であったのは、この作品が過度に(リスト的な意味での)超絶技巧を追求する作品ではなく、むしろピアノとオーケストラという組み合わせにおける表現の可能性を追求したものであり、同じく当時研究を重ねていた複雑な対位法的書法を協奏曲という枠内で試してみる、という側面があったのだろう。冒頭の激しいパッセージの後、C-H-A-A(ド-シ-ラ-ラ)と下がっていく短いモティーフが、その後の音楽を有機的につないでいく。

このような構造は、後から作り足された、穏やかな叙情性を湛えた**第2楽章**(インテルメッツォ)においては、あまりはつきりとは感じられないかもしれない。だが、これは**第3楽章**(アレグロ・ヴィヴァーチェ)へと切れ目なく繋がっている際にふたたび用いられた。短調の響きによるC-H-A-Aのモティーフが、何度も繰り返されながらやがて長調によるC#-H-A-A(ド#-シ-ラ-ラ)へと変化し、全曲をまとめていく。シューマンの練達の作曲技法は、妻クララという最良の紹介者を得て、後の時代、協奏曲に大きな影響を及ぼすことになる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ブラームス(シェーンベルク編) ピアノ四重奏曲 第1番

ト短調 作品25 (管弦楽版)

シェーンベルクによる編曲:1937年／初演:1938年5月7日、ロサンゼルス／演奏時間:約40分

「革新主義者ブラームス」への、シェーンベルクのオマージュ

教育者としてのアルノルト・シェーンベルク(1874～1951)といえ、12音楽をはじめとする最先端の音楽を教えた、というイメージがどうしても先行しがちである。だが、実際のシェーンベルクが教材として用いたのは古典派を中心とする作品の数々であり、自身で執筆した教材がそれを雄弁に物語っている。「歴史主義者」を標榜^{ひょうぼう}していたシェーンベルクは、バッハ、ベートーヴェンに連なるドイツ音楽史を担う存在としてみずから位置づけ、自身の音楽が歴史の「進化」の過程で必然的に生まれたものである、ということを証明するためにも、これまでの音楽を後進に教えておく必要性を感じていたのだろう。

19世紀後半のドイツ音楽史においては、オペラや交響詩によって新しい音楽を切り拓いた、進歩派と目されたリストやワーグナーに対し、一世代前に隆盛を誇った交響曲などにこだわった保守派のブラームスという定式が、少なくとも20世紀においては抜きがたく存在していた。そのような通俗的な論に対して、真っ向から反対の論陣を張ったのがシェーンベルクであった。1933年、ブラームスの生誕100年を祝うかたちで(奇しくもナチ

ス・ドイツの迫害を避けアメリカに亡命した年でもある)、フランクフルト放送からブラームスに関するラジオ講演を依頼されたこともあるシェーンベルクは、この知見をもとに、1947年に「革新主義者ブラームス」という論文を発表する。前年に激しい心臓発作に見舞われていたこともあり、創作のペースは落ちていたが、ブラームスに関する世間の誤解を是非とも払拭^{ふっしょく}しておきたい、という想いから綴^{つづ}られたものであった。1937年に編曲され、38年にロサンゼルスで初演されたブラームスのピアノ四重奏曲第1番ト短調も、誤解が基で、ピアニストが大きな音で演奏しすぎて弦楽器が聞こえず、その精妙な作曲技法を味わい尽くすために編曲した、という旨が記されている。

おそらくシェーンベルクは、この作品こそ、ブラームスの「革新的」な作曲技法が最良のかたちで詰まっていると考えていたのだろう。**第1楽章**(アレグロ)の冒頭、D-Bb-F#-G(レ-シb-ファ#-ソ)と続く四つの音がモティーフとなり、さまざまに変形されながら曲全体に張り巡らされていくその手法は、まさにベートーヴェンの交響曲第5番第1楽章冒頭や、先述のシューマンのピアノ協奏曲の

動機による全曲の統一を意識したものが、その手法はさらに巧緻なものへと変貌している。第2主題は、原曲と同様にチェロの豊かな旋律で提示されるが、これは区切りのよい8小節ではなく、1小節多い9小節。この非対称性こそが、ブラームスの音楽に複雑さと活気とを与えている原動力であろう。

間奏曲と題された、ハ短調による**第2楽章**（インテルメッツォ：アレグロ・マ・ノン・トロppo）で特徴的なのは、8分の9拍子であるにもかかわらず、敢えて拍頭をはぐらかすような旋律が持つリズムの不規則性であろう。原曲のピアノパートの細かな走句をオーケストラに移し替えるにあたって、シェーンベルクは木管楽器を中心とした編曲で聴かせ、原曲の軽快さを失わぬような工夫を施すことに成功している。

続く緩徐楽章、**第3楽章**（アンダンテ・コン・モート）は明るく穏やかな雰囲気ではじまるが、ヴァイオリンで提示される冒頭の主題は、明らかに第1楽章冒頭のモチーフから派生してできたものだろう。中間部（アニマート）では、大太鼓、シンバル、トライアングルなどが弱音で用いられており、これが第4楽章での打楽器群の活躍の伏線となっている。ブラ

ームスの音楽からこのような華やかさを感じ取っていた、シェーンベルクの感性に脱帽せざるを得ない。

第3楽章が長調で推移したのに対し、「ジプシー（ロマ）風ロンド」と名付けられた**第4楽章**（プレスト）は冒頭楽章のト短調へと戻るが、何度も繰り返されるこのロンド主題も、4小節ではなく、3小節単位で区切られている。テンポの速さもあいまって、この3小節があたかも3拍のように感じられるだろう。原曲の息せき切るような音楽の流れ、わざわざ「ジプシー風」と題された荒々しさを表現するために、第3楽章では控えめに用いられていたシロフォンなど、打楽器が大いに活躍することになる。

シェーンベルクの編曲は、単にこの曲をオーケストラに置き換える、というだけの意図でなされたものではない。その立体的で奥の深い音響に接すれば（そしてその上で原曲と聴き比べてみれば）、19世紀よりも管弦楽法の多様性がより広がった20世紀前半において、ブラームスの作曲意図を再解釈し、その革新性をより強調し、さらには自身の楽曲がブラームスから直接つながっていることに気づいてもらおうとしたための編曲であったということが伝わってこよう。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（バスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、小太鼓、タンブリン、トライアングル、シロフォン）、弦五部

プログラムノーツ		相場ひろ あいば ひろ・音楽ライター
PROGRAM NOTES		
第13回 読響メトロポリタン・シリーズ 1.23 〈金〉	第578回 サントリーホール名曲シリーズ 1.24 〈土〉	

武満徹 ジティマルヤ

作曲：1974年／初演：1974年11月22日、ロッテルダム
高橋美智子（マリンバ）、エド・デ・ワールト指揮ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団／演奏時間：約15分

マリンバの響きと共に武満が新境地を開いた70年代の名品

武満徹（1930～96）にとっての打楽器は、元来、定まった音高のない楽器であり、強く叩いたり、打ちつけたりするものではなく、発音の手だてを繊細に変えることで豊かなニュアンスを帯びた音を生じさせるものとしてイメージされていた。それゆえ彼は、打楽器アンサンブルのための〈四季〉（1970年）や打楽器独奏と管弦楽のための〈カシオペア〉（1971年）といった注目すべき打楽器作品を発表する一方で、マリンバのように定まった音高を持つ鍵盤打楽器は、融通の利かない、自分の音楽とは相容れないものとみなしていたという。彼がこの楽器に抱いていたイメージを打破したのは、マリンバ奏者の高橋美智子である。武満の言によれば、

彼女は彼に「（自分の偏見を）忘れさせるほどの大きな魅力と、この楽器が生み出す音楽の歓び」を教えてくれたのだった。

高橋の委嘱を受けて書かれた〈ジティマルヤ〉は、ベンガル語で「旋律の花束」を意味する題名で、タゴールの詩の一節から採った。タイトル通り、ここでマリンバは打楽器というよりも旋律楽器的に扱われ、破裂音的な強奏から軽やかで弾力のあるトレモロまで、多彩な音を駆使しながら、武満が言うところの「中近東風のニュアンス」を持つ歌を奏でていく。また管弦楽はヴァイオリンを欠くために、同時期の武満作品にみられる感覚的な質感が薄められており、管楽器群の合奏が醸す独特の色合いを帯びたともいえる響きが多用されているのも特徴的である。

楽器編成／フルート2（ピッコロ、バスフルート持替）、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（エスクラリネット、バスクラリネット持替）、ファゴット、コントラファゴット、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、打楽器（サスペンデッド・シンバル、ログドラム、木魚、トライアングル、ヴィブラフォン、チューブラーベル、鐘、リン、マラカス、カウベル、クラベス、ゴング、タムタム）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、ギター、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、独奏マリンバ

マーラー 交響曲 第5番 嬰ハ短調

作曲:1901～02年／初演:1904年10月18日、ケルン 作曲者指揮ケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団／演奏時間:約68分

マーラーの新たなステップとさらなる成熟が刻まれた記念碑的大作

20世紀に入ると、グスタフ・マーラー（1860～1911）の作曲家としての評価は目に見えて安定してきた。交響曲第5番が初演された1904年ごろには、マーラーの作品を単なる「楽長の手なぐさみ」とみなす者は減少し、音楽家の間には熱狂的な支持者も生まれつつあった。それでもマーラーは、第5番の発表については慎重であった。作品自体は1902年にいったん完成していたものの、彼はさらに時間をかけて改訂を積み重ねた上、聴衆も批評家もそれまでの自作に対して好意的であったケルンを初演の地を選んだ。1904年10月18日、彼は自らの指揮によって交響曲第5番を初演する。しかし、この作品は広く称賛を得るには至らなかった。ある批評家は新作が旧作の支持者を失望させたとし、これまで以上によく「彼の内面を吐露」しているものの、「数多くの不協和音と表現のどぎつさ」が「しばしば聴き手の喜びを損なった」と述べている。

実際、交響曲第5番はそれまでの4曲との間にスタイル上の大きな断絶をみせる。第1番や、後に「角笛交響曲」と呼ばれる第2～4番同様、自身の作曲した歌曲の引用やほのめかしを含むものの、

第1番以来の声楽を欠く純器楽作品となった点が挙げられる。また、第1、2番にみられた「闘争から勝利へ」的なシンプルな標題性が後退しており、むしろ安易なストーリー性に対する懐疑と冷笑が、曲想や構成には垣間見える。加えてその音響も対位法的書法の拡大によって格段に複雑さを増している。この新作が旧作に慣れ親しんだ聴衆を戸惑わせたことは想像に難くない。しかし同時に、これらの特徴はマーラー自身の作曲家としての習熟を示している。交響曲第5番から第7番までの3作の交響曲は、ひとまとめに彼の中期作品として呼びならわされるが、第5番は作曲家の技量の飛躍的な成熟を示して、新たなステップの幕開けを告げるにふさわしい力作となった。

交響曲第5番は5楽章からなり、第1、2楽章を第1部、第3楽章を第2部、第4、5楽章を第3部とする3部構成をとる。

第1楽章 “葬送行進曲” 単独の楽章というよりも、第2楽章への序奏という意味合いが濃い。冒頭でトランペット独奏が奏でる葬送の主題を中心とする行進曲の部分と、より詠嘆調の強い旋律によるトリオとが交互にあらわれる。中間部では

突発的な強奏が音楽の流れを中断し、激情に駆られて大きく高揚した後、再び葬送行進曲が回帰するものの、やがて失速して消え入るように終わる。

第2楽章 ソナタ形式をとる。ヴァイオリンに登場する緊張感に満ちた旋律をめぐる第1主題部と、第1楽章中間部の旋律から派生した主題をチェロが切々と歌い上げる第2主題部の後、展開部に至るが、第1楽章の回想をはさみつつ、音楽は興奮と沈静を繰り返す。再現部の後、高らかなコラールが金管群にあらわれて終楽章の雰囲気予告するが、音楽は再び力を失って、静寂へと帰る。

第3楽章 “スケルツォ” マーラーが自作の楽章に「スケルツォ」と明記したのはこれが初めてであるにもかかわらず、常識的な意味でのスケルツォではない。全体を支配するのがワルツないしレントラ一舞曲のリズムである上に、構成の複雑な楽曲となっているからだ。全体は主部と二つのトリオからなりながら、第2トリオの後に第1トリオの主題を中心とする一種の展開部が登場し、さらに再現部風にすべてのエピソードが回想される長大な部分が続く。全曲を通じて「オブリガート」と指定されたホルン独奏が活躍するのも特徴である。

第4楽章 “アダージェット” 弦楽合奏とハーブのみで演奏されるこの楽章は、映画「ベニスに死す」に用いられたことでも有名である。3部形式をとり、甘美な憂愁をたたえた旋律が絶えず転調を重ねながら歌い継がれていく。その雰囲気は〈リュッケルト歌曲集〉中の“我はこの世に忘れられ”を連想させる。

第5楽章 “ロンド・フィナーレ” いくつもの主題が交互に出現する点でロンド形式によるとも言えようが、高度に組織化された対位法的書法もあって、全体は複雑な構成をとる。ファゴットが〈子供の不思議な角笛〉中の“高い知性への賛美”を引用する冒頭の後、ホルン合奏が主要主題を提示するものの、音楽はすぐさまフーガへと移行し、さまざまな動機がその中にとりこまれていく。第4楽章の旋律も引用されるが、軽快なフーガの流れに乗って奏でられるために全く異なる印象を受ける。目まぐるしい転調を伴いながら音楽は高揚し、第2楽章後半に登場したコラールが高らかに鳴り響いて、軽やかな雰囲気の中に全曲が締めくくられる。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット、バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、ムチ、タムタム）、ハーブ、弦五部

気楽にクラシック ～ヨーロッパ音楽紀行～

第6回
《哀愁の祖国、ポーランド》

1.28 〈水〉

ヨーロッパを巡る本シリーズの第6回のテーマは、東欧の北に位置するポーランド。“ピアノの詩人”ショパンの母国であり、マズルカやポロネーズを生んだ、音楽的にも重要な国です。しかし同国は、独立への闘いと挫折の歴史を歩んできました。今回の2曲もそれと無関係ではなく、なかでもショパンの協奏曲に漂う哀愁は、独特の魅力となって聴く者の心に迫ります。

指揮は、活力溢れる読響首席客演指揮者・下野竜也。ルトスワフスキの作品は、“隠れた名曲”の紹介に努める彼ならではの選曲です。そしてショパンは、本場の看板ピアニスト、ヤブウォンスキによる極め付きの名演が期待されます。今回もナビゲーター・中井美穂のお話とともに楽しみください。



ナビゲーター

中井 美穂 Miho Nakai

アナウンサー

ロサンゼルス生まれ。1987～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。「プロ野球ニュース」「平成教育委員会」などの番組で人気を集める。

現在、「タカラヅカカフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディアパートナー」(FM東京)にレギュラー出演。97年から連続してメインキャスターを務めるTBS「世界陸上」をはじめ、スポーツ・情報・バラエティと幅広い分野のテレビ番組やCMに出演。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読も行っている。

2013年より、読売演劇大賞選考委員を務める。

1曲目は、ヴィトルド・ルトスワフスキ(1913～94)の《**小組曲**》です。ルトスワフスキは、19世紀前半のショパン、後半のヴィエニャフスキ、20世紀前半のシマノフスキに続く、20世紀後半＝第二次大戦以降のポーランドを代表する作曲家。首都ワルシャワに生まれた彼は、たびたび作風を変えつつ、古典と現代の語法を融合させた独自のスタイルを築きました。

ただ、1945年に独立したポーランドは、ソ連の強い影響下にあり、特に1950年代前半までのスターリン独裁時代には、音楽も“社会主義リアリズム”＝民俗的で明快な方向性を半ば強制されていました。《**小組曲**》は、そうした時期の所産。1950年にワルシャワ放送の依頼で作曲した室内オーケストラ曲を、翌年通常のオーケストラ用にアレンジした作品です。

曲は、“笛”(アレグレット)、“万歳ポルカ”(ヴィヴァーチェ)、“歌”(アンダンテ)、“踊り”(アレグロ・モルト)と続く短い4曲で構成され、主題はすべてポーランド南東部のマチョフ村の民俗音楽に拠っています。それゆえ、西側で前衛音楽が台頭した時代に書かれたとは思えぬほど明快な作品。とはいえ、多彩な表現や抑えきれぬ生命力が、作曲者の才気を物語っています。

次いで本日のメイン、フレデリック・ショパン(1810～49)の**ピアノ協奏曲第1番**。ショパンは、ワルシャワ近郊のジェラゾヴァ・ヴォラで、フランスから移住した父とポーランド人の母のもとに生まれました。しかし20歳のときポーランドを離れ、その後パリのサロンで活躍しました。彼の2曲のピアノ協奏曲は、祖国を離れる直前に書かれた若き日の作品です。

ワルシャワ音楽院卒業直後の1829年夏にウィーンを訪れて大評判をとったショパンは、国際的な活躍を期して、より万人受けする協奏曲の作曲を思い立ちます。1830年初めにまずへ短調の協奏曲(第2番)を完成。次いで同年8月、この曲を完成し、10月11日、再びウィーンへ出発するにあたっての告別演奏会で自ら初演しました。番号が作曲順と逆なのは、出版年の逆転によるもの。告別演奏会には、初恋の人コンスタンツィア・グワドコフスカがソプラノで参加していたため、ショパンはひどく緊張していましたが、演奏自体は大成功を収めたといわれています。そして彼は11月2日、ウィーンへ旅立ちましたが、直後にポーランドで動乱(当時はロシアとドイツの支配下にありましたが)が勃発。反ポーランド的なウィーンでは活動困難となって、1831年ポ

ーランドの貴族が多数亡命していたパリへ移住し、以後二度と祖国の土を踏むことはありませんでした。つまり同曲は、若きショパンの意欲が詰まった“青春の記念碑”であり、故郷からの“旅立ちの音楽”でもあるのです。

曲は、ピアノの華麗な名人芸と旋律美に溢れた、詩情豊かでロマンティックな名作。多くのピアニストによって愛奏され、世界中で高い人気を得ているのは言うまでもありません。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ 冒頭の堂々とした第1主題と甘美な第2主題を中心として華麗に展開。曲全体の約半分を占める長大な楽章です。

第2楽章 ロマンس、ラルゲット ショパン自身「美しい月夜のような、懐かしい思い出を呼び覚ます」と記したノクターン風の緩徐楽章。夢見るような音楽が続き、そのまま第3楽章へ移ります。

第3楽章 ロンド、ヴィヴァーチェ
「クラコヴィアク」というポーランドの舞曲風に書かれた軽快な主題が何度も繰り返される、^{はつらつ}澁刺としたフィナーレ。

ルトスワフスキ 小組曲

作曲:1951年/初演:1951年4月20日、ワルシャワ(フル・オーケストラ版)/演奏時間:約11分

ショパン ピアノ協奏曲第1番 木短調 作品11

作曲:1830年/初演:1830年10月11日、ワルシャワ/演奏時間:約39分